

## 古代人の思惟についての一考察

— 中国の太陽観を例にとつて —

平 岡 禎 吉

Teikichi HIRAOKA

## 1

ここに論ずる古代とは中国をさすものであり、時代区分も資料を漢初の淮南子に多くを求めているので、必ずしも厳密なものではない。したがつて其の考察も太陽観を主にした一部分にすぎないものである。太陽観を例に引いた理由は、太陽が古くから人々の深い関心を払つていたものの一つであるから、それに対する思考過程を考えることによつて、本題を一応明らかにし得ると考えたからである。地球から太陽を眺めて太陽が動くか、地球が動くと考えかとの二つの見方は、世界で古くから論議された問題である。このことは太陽に限らず天体に浮ぶ星辰をも併せて考えられるので蔡邕の天文志には蓋天、渾天、宣夜の三説が成立していた。蓋天説は最も古い思想で、淮南子天文訓、史記天官書、周髀算経、大戴礼天員篇、呂覽季春紀などに記述されている。渾天説は淮南子や列子によつてその思想を知ることが出来るが、広くそれを流布した人は前漢末の揚雄であろう。その後多くの共鳴者が現われたが、後漢の王充は修正された蓋天説を強く主張している。人間が仰いで空を眺めると天は円くして動き、地は平面にして静止して見える。蓋天説とはこの考え方に立つて天体の動きを規定したもので、素朴な、そして古い考え方である。銭塘の淮南子天文訓補注によれば、祖暅之の天文録を引用して蓋天的にも三体あつたことが述べられているがそれは省略する。

## 2

天の高さについては、莊子逍遙游篇によれば九万里と解されるし、淮南子天文訓には或は十万里とし、或は去地五億万里とあり、この15万里は地下より測定したものとして地の厚み六万里（周髀算経に従う）を除けば九万里に達する。淮南子地形訓によれば八万里乃至九万里と解される。周髀算経、尙書考靈囑、洛書甄曜度も八万里と述べているが、それらは上代の思想を伝えたものと思われる。従つて天の高さが八万里乃至九万里となると、それは太陽の高さに解してもよいものである。淮南子天文訓には其の測定法を次のように述べている。

天の高さを知らんと欲すれば表の高さ一丈、正の南北相去ること千里、同日其の陰を度るに北表は二尺、南表は尺九寸なり。是れ南千里の陰は短かきこと寸、南二万里なれば則ち景なし。是れ日の下なり。陰二尺にして高さ一丈を得れば南一にして高さ五なり。則ち此より南に置いて日の下の里数に至る。因りて之を五にして十万里となす。則ち天の高さなりと。

淮南子や周髀算経には八尺の長さの棒を立てて其の日影を測り、それによつて太陽の位置を推定したことが記されている。例えば冬至の日の太陽の最も高い時刻に測つた景の長さは1丈3尺とな

り、夏至の日の同じような時刻に測つた長さは1尺5寸（以上天文訓）となる。それは太陽の位置が変ることによつて影に長短を生じたものであるが、之を同日同時刻に於て二ヶ所以上の地点に於て測定すれば、南方へ千里ずつ場所を距てる毎に影が一寸だけ短くなることを知つた。其の結果南へ二万里に達すれば、そこは太陽の直下となり、景は生じないこととなる。（測量地点は明記されていないが夏至の日の太陽の直下の地より一万五千里北方の地点が周の地となつている。（天文訓））距離と影の関係は、以上に述べた法則を用いるが、既に述べた所の天の高さを求める文に従えば、標の高さは1丈のを用い、標の高さ1丈のものが影2尺を生ずる間隔が、二万里に相当するを以て距離と高さとの比を1と5の数を以て現わし、平面の距離二万里に対し、高さは十万里と算出している。然しながら日晷の長さを求めるには普通八尺の表を用いているのに關らず天文訓に1丈の表を用い、其の結果十万里を設定した理由は審かでない。通例に従えば八尺の表を用いて1と4の関係に於て八万里に作るべきものであるから、太陽の高さは八万里といえるであろう。以上のように上代に於ては、東西南北の方位及び其の距離測定、或は天の高さを知るために影一寸は距離一千里に相当することを実証し、之の法則を適用して平面、立体の観測を行つたのである。若しも之の両者の関係が不完全なものであるならば、其の根本がくずれることとなり、其の推論は成立しなくなる。千里の距離と1寸の日晷の組合せは如何なる方法によつて成立させたかは明らかでない。中国の天文学が西方より入つたものか、或は中国の生活の中より生れたものか、大いに論議されるところである。管見によれば淮南子の随所に現われるところの太陽に対する重大な関心と、種々の測定法のあることから推察すれば、以前のかかなり古い時代に於て単純ながら日晷の観察が行われたものと考えている。しかも漢初に入つた頃は、土地と距離とについては、一般に通用される数が存在していたものであろうと思う。王充の論衡談天篇に日南郡は雒陽を去る万里であるが、徒民のかの地より還つたものに問えば、其の地はまだ日の直下の南には位していないから、雒陽を去る二万里の地が日南である。とあるのを見ても、淮南時代に日南日北と呼称されたところは、にわかには信ずることは出来ないし、懷疑的態度で物を見ていた王充のような人でさえ、実測したものでないことが知られるのである。

次に高く上つた太陽と朝夕のそれとの遠近はどうであるか。列子湯問篇には次の文がある。

孔子東游し兩小兒の辯鬪するを見る。其の故を問う。一兒曰く、我日の始め出ずる時人を去ること近くして而して日の中する時遠しと以へりと。一兒は、日の始めて出ずるや遠くして而して日の中する時近しと以へりと。一兒曰く、日始めて出れば大さ車蓋の如し。日の中するに及びては則ち盤盂の如し。此れ遠き者小にして而して近きもの大なりと為さざらんやと。一兒曰く、日始めて出れば滄滄涼涼たり。其の日の中するに及びては湯を探るが如し。此れ近き者熱くして而して遠き者涼なりと、為さざらんやと。孔子決すること能はず。兩小兒笑いて曰く、孰れか汝を多知となすか、と。均しきは天下の至理なり。

列子の文によれば結論としては極めて曖昧であるが、而し古来よりそのことが問題となつて居りそれには両論があつたことも推定されるのである。即ち遠いものは小さく見え、近いものは大きく見

えることによつて太陽は出入時が近く従つて日中の時が遠いと断定したこと、熱いものは近づけば熱を感じず、遠ざかれば涼となる。これによつて日中時は近いと断定する。いずれも之を実証する、論拠を有して之を類推し以て自説の正当性を主張する。これに対して均しきは天下の至理なり。と断ずる列子の文は、天文学的に考えた表現とするよりも論争するそのものを否定して、それより超越しようとする、むしろ哲学的な意図に外ならないのであるから、本文の論旨から離れてしまつている。

## 3

夜になつて太陽が見えなくなるのは何故か。これは重大な問題であつた。淮南子には二つの解釈がなされている。地形訓に、燭龍は雁門の北方に在り。委羽の山に蔽われて日を見ず。というのが其の一つである。即ち北方にある高山に遮ぎられて太陽が見えないとする。北方には更に崑崙山という天に達する山があることも記されているから、その山々にかくれて北へ廻つた太陽は見えないことになる。他の一つは同じく道忞訓にある文で、盧敖北海に遊び太陰を経て玄闕に入る。というのがそれである。つまり北方は太陰の地であつて、陰気が深く存在する所として居り、地形訓にも、北方は幽晦不明、天の閉ざす所なり、と言つている。しからば北方の暗黒は太陽の光を山が隠蔽するために起るとするか。或は陰気の立ちこめたが故に起る現象とするか、或は両者の一つに見て太陽の光を遮ぎることによつて陰気起るとも見られぬことはない。列子周穆王篇には次のように述べている。

西極の南隅に国あり、境界の接する所を知らず。古莽と名づく。陰陽の気の交らざる所なり。故に寒暑弁ずるなし。日月の光の照らさざる所なり。故に昼夜の弁ずるなし。

といつて太陽が西の下を廻らないことを暗示して居り、又

東極の北隅に国あり、阜落の国という。其の土気常に燠かにして日月の余光の照すあり。

とも述べている。董仲舒の春秋繁露陽位の篇には

陽気始めて東北に出でて而して南行するは其の位に就くなり。西転して而して北に入るは其の休に蔵するなり。

といい、必ずしも太陽に関して述べてはいないが、位に就くに対して休に蔵するの文字を用いたところは、太陽自体も北方に於て活動を停止し人の眠るが如く太陽も運行を休止すると解したと見られることも出来るであろう。休止するとすれば、光熱も停止するか、或は光熱は益々一定所に強化されると見るかが問題となる。古典に現われる十日の文もこの思想にも関係あるものと考えられ、十日の論は淮南子の地形訓や本経訓に述べている。既に述べた列子の文のように、東極の北隅の地は土気常に燠なり、といい、山海経大荒東経に、谷あり、湯源谷という。湯谷の上に扶木あり。といい、又同じく海外東経に、湯谷あり。湯谷の上に扶桑あり。十日の浴する所なり、9日下枝に居り、1日上枝に居る。と説いているのは、ともに東北方の地を暑熱に見、十日の地と連関させているのは、太陽の休止を想像したのと考えられる。結局北方は日光が照さない。照らしても陰気に遮ぎられる。太陽が休んで活動を停止する。などの理によつていずれも幽晦不明の地と考えられている。而して太陽が西にはいることを地中に入つたとしたり、地の下を廻つてくると考えることは理解さ

れなかつたものであろう。しかるに後漢の頃に至つて地中にはいると考えるものが現われたものと見え、王充は論衡説日篇に次のように之を反駁している。日は地の中にはいるのではない。地の中は水があるから日が水中にはいるということは考えられない。地中に入ったように見えるのは、入つたのではなく自分の位置より遠ざかつたに過ぎない。人の望み見る距離は十里に過ぎない。其の果の地を見れば天と地が合している。合しているのではない。それは遠くはなれてかく見えるのである。故に太陽も日が近づけば出るように見え、遠ざかれば入るように見えるだけである。されば日の入つた西方の人から見れば正に日の中に当るのである。と。以上によつても明らかなように、王充はどこまでも蓋天説の立場にあつて日の運行を解釈した。かくて太陽は天の最高の北極星と地球の間を平面に円を描いて運転していたこととなる。夏の日は長く冬の日の短い理由について呂氏春秋有始覽には、

極星、天と俱に遊ぶ。而して天極は移らず。冬至には日は遠道を行き、四極を周行し、命じて玄明という。夏至には日近道を行き、乃ち上に参ず。

といつて、夏には天の極に近く上つて行き、冬にはこれより下つて広がつて行くという。周髀算経や張衡の靈憲には、天に近ければ則ち遅く、天に遠ざかれば則ち速し。と述べて冬夏の日の時間を解いている。其の他一日、一年の周天のこと、日月の関係、天と太陽の動行など、天文学にわたることは茲には省略する。然しながら淮南子の文を細かにみると、蓋天、渾天の両説が現われている。渾天説がとなえられたのは、太陽は昼の間には半円を描いて出入している。残りの半円はどうしても地の下方に作らなければならないからである。その太陽が、地中や地下を廻るとすれば合理的な解釈が出て来ない。肉眼で見る限りに於て天は円であり、地は方となつて蓋天説を取らざるを得ない。しかもその場合でも北方に廻つて暗黒になる理由を発見しなければならなくなる。これが既に述べた解釈である。されば観察によつて其の運行を考えた時に、蓋天、渾天、いずれの方向にも進み得ることとなつたものであろう。

淮南子原道訓に、

夫れ、道なるものは、天を覆い、地を載せ、四方を廓し、八極を析き、高さ際るべからず。深き測るべからず。天地を包裹す。

といい、同じく繆称訓にも、

道は至高にして上なく、至深にして下なし。平乎として準。直乎として繩。円乎として規。方乎として矩。宇宙を包裹して表裏なし。洞同覆載して礙する所なし。

といい、同趣の文が道応訓、俶真訓、天文訓にも見ることが出来る。道とは空間を満たす気の動作に外ならぬから、これらの文によつて渾天の説は充分に確めることが出来る。従つて列子天瑞篇に見える、天地は空中の一細物なり。という形容と相通ずるものである。されば漢の武帝の頃、落下閎が渾天儀を造つたと伝えられているが、これは信じてよいものと思う。而して淮南子は、渾天説を内蔵させながら蓋天説を表明し、大戴礼、呂氏春秋なども蓋天を説いているに関らず、西漢末の楊雄、桓譚が渾天説を唱えてより、馬融、鄭玄、張衡、陸績、蔡邕、王蕃、葛洪などの人々がこ

れに賛し、僅かに王充が之に反対しているに過ぎないのである。但し蓋天、渾天の説といつても、古代のそれは至つて素朴なもので、太陽の運行を中心に考えたものであるから、後世より見た渾天や蓋天の説とはかなり異つた内容のものであつただらう。古代の太陽観察については、始め土圭を利用して日景を測つたことが周礼に記載されている。次いで台を用いて観察したらしく、現在の河南登封県告成鎮に周公測景台の遺跡があり、ここは古い時代に陽城と称せられた土地である。而してこの辺が淮南王時代の観察地となつたものと思われるし、この地での測景は漢、晋の時代にしばしば行われている。

## 4

太陽の出現はいつか、どうして出来たものか。そしてそれは何か。淮南子天文訓には次のように述べている。

虚廓宇宙を生じ、宇宙氣を生ず。氣に涯垠あり。清陽なる者は薄く靡きて而して天となる。重濁なるものは凝滞して而して地となる。…天地の襲精陰陽となり、…積陽の熱氣火を生ず。火氣の精日となる。

以上によれば虚空の中に時間と空間を生じ、そこに元氣が現われ、それが天地に分れる。天地より陰陽の氣を發し、陽氣が集つて火を生じた。空中の火氣が集つて太陽となつたという。従つて日は陽氣の主で太陽である。太陽にあたることによつて人は直接に熱氣を感じずから火氣の精の集りと考えることは容易であらう。加藤常賢博士の研究によれば、尙書に見えた帝堯は炎帝、[火帝、赤帝と深い関係にあり、同じく羲和も太陽に当ることを論じて居られるが、それは興味深い研究である。

次に太陽の黒点は何か。太陽の中に三足鳥が住んでいると見、月の中に蝦蟇の住むのと対比させて考へている。淮南子精神訓に、日中跋鳥あり、而して月中蟾蜍あり。日月其の行を失えば、薄く蝕して光なし。というのがそれである。張衡の靈憲には之を継承して日は陽氣が積つて鳥の形をなし、月は陰氣が積つて兔や蛤の象をなすと説いて居る。これに対して王充は論衡の説日篇で火中に鳥の住むことの不合理を説いている。それらは太陽が動くことと鳥の飛ぶことと関係づけ、しかも鳥は陽氣の動物であり、住む鳥や兔が正しい規道を行かないことによつて相手に蝕が生ずるとして居る。何故に鳥が正常の道を通らないのか。

人間の生活は逐一天の監視を受けているので、天子や王の行動に非あれば、即座に日月はその反応を示す。淮南子天文訓に、人主の情、上りて天に通ず。日月は天の使なり。麒麟鬪いて而して日月食す。などと表現されるのがそれであり、日蝕の変も天の人主に対する意思の表示であるとするのである。詩經小雅十月之交篇には、日月が凶を告ぐるは各々其の規道を進まないからである。しかも月食は常に見られることであるが、日食というのは非常のことである。といい、日月蝕は互に侵された時に起るものと考えて居る。

## 5

以上によつて古代人の太陽に対する觀念の大体を考へて見た。それによつて古代人の思惟形式を

考察すれば次のことが言えるだろう。

イ. 一般には人の思惟は精神的な緊張に伴つて生ずるものである。中でも驚駭や疑いは其の例によく引用されている。太陽に対して恐れや疑惑は当然生じたものであろうが、我々が之を文献に求めると、これと異つた理由が現われて来る。尙書の堯典に次の文がある。

乃ち羲和に命じ、欽みて昊天に若い、日月星辰を曆象し、敬みて人事を授く。

つまり太陽を観察して天文を正すことは、農民のために時の変化を知らせることがその目的であつた。人類の生活では採集や狩猟生活の時代でも太陽と全然関係がないとは言えない。而しながら人間の生活と直接にして、しかも重大な関係を持つようになつたのは、農耕生活に入つてからである。農民が生活に従事してゆくうちには、自ら太陽の運行と農産物との関係が密接なものであることを知り、太陽観察が真剣に取組まれ、其の変化によつて時節を測つたことは容易に理解されることである。尙書の冒頭に堯帝の政治をあげて農民のために太陽の観察を行つたとするのは当然なことであろう。最近の研究によれば、殷代もすでに農耕時代に入つたものと論ぜられているから、この太陽観察も相当の歴史を経たものと考えられる。このようにして太陽の動静に着目し、これが漸次に高度の発展を遂げたが、そのことは人類の生活と重大な関係にあり、その必要に迫られて、多くの人々の知恵を結集したものであろう。太陽が自己の生活に欠くことの出来ない対象物であつて見れば、それに一種の親近感さえ抱き、太陽の熱によつて農産物が生育することは、天の仁の発現であり、茲に日月は天の使なりという表現を取るに至つたものであろう。中国に於て特異な発展を遂げるに至つた天文学は、このような理由によつて工夫と創意の集腋されたものと見ることが出来よう。換言すれば、人間の思惟の対象になるもので、人間の生命に直接関係を及ぼすものは、特に強い関心が集まり、そのような対象物への思惟は、人間集団にとつて空間的な広がりや時間的の深みを加えて行くようになつたものであろう。こうして人類の思惟も実用と需要とによつて著しい進展を遂げたことが知られるのである。

ロ. 彼等の結論は、実証し確認し得るものを前提として論を進めていることである。例えば太陽の遠近を考える場合に、A. 火に近づけば熱を感ずる。B. 太陽が高く上れば熱を増す。C. 故に朝夕の時よりも日の中する時の方が近づいている。

A. 近くなれば物は大きく見える。B. 朝夕の太陽は大きく見える。C. 故に朝夕の太陽は日の中の時より近づいている。との過程を経て成立している。

その他、太陽を火と見たこと、黒点を烏と見たこと、北方は暗くして寒いこと、などいずれも上の方式に充てて考えることが出来るであろう。中国の古代人は、観念的に構成された前提を以て結論を下すことなく、あくまでも実証的であるから恰も三段論法の形式となつたり、弁証法的論理の進め方を取つていく。

ハ. 而しながら論理の進め方はすべて直観的である。目で見、耳で聞き、触覚によつて得たものを基礎にして思惟を発展させていく。天は円形に見えるので、天は円とし、地は平面で四方に

広がりを持つて見えるので地を方という。火が燃えたら必ず上昇する。従つて地上で燃えた火は高く上り、天に集つて太陽となる。(星は水分の上つたものであり、天漢は漢水の気が上つて成つたものとするのと一様) 太陽の出入する位置が、一年に南北する点を一往復する事実を発見し、それによつて曆を考案したこと、太陽の景を測るに八尺の標木を用い、之を応用して、東西南北の正位置や其の距離を測定したことなど其の一例であろう。従つて前提に立つ直観的な結論や実験によつて得た結論を論証の前提に用いる場合に、大小前提が緊密に結びつき、断定を下すために決定的要素になり得るといふ考証を経ないままに、その前提と結論とを結んでしまうので、結論を誤つたり、飛躍したものになつて来る。ただ両者の何かの類似点を手がかりとして、それだけによつて推理し結論をしてゆく場合が多い。この思考過程は必ずしも有形物に対する場合に限らないものである。天上の靈魂世界の如き形而上の觀念構成に於ても、多分にこの直観的、力動的觀察が重大な決定要素となつてゐることを認め得るのである。(この論証は省略)

ニ. 古代の他民族には太陽を神格化して崇拜する例はいくらかもある。然るに中国に於ては太陽そのものは、信仰の対象にはならない。火其のものが地上に於て祭られた時代もあつたと思われるし、天上に生活する靈魂を信じて、それを祭つたことも長い歴史を持つてゐる。しかるに太陽そのものはあくまでも物質的であり、火気の精である。帝堯や羲和というすぐれた人格と関連させて見る考え方もあるが、太陽は陽気、火、天の使としての存在にしか認められず、そのままで統一神としての天の位置を占めたことはない。これは中国人の物の見方を示したものとして法意すべきことであろう。勿論原始種族の社会に於ては、自然現象の影響をうけ、それを畏怖し尊敬してその自然の支配の下に満足していたから、その自然現象が生命あり、意志あり、感情あるものとして之を信仰し、保護神として動物、植物、山川、太陽や火を其の象徴と見做した、所謂図騰崇拜の社会が存在したことは事実であろう。楚の民族が太陽の威力を崇拜したことは九章や九歌によつて知られるし、齊の八神の中に日、月のあつたことも史記封禪書の中に見られ、礼記祭義篇や、周礼春官大宗伯にも、同じく日、月を祀つてゐる。このように日月を祀るのは、日月を神として祭つた、極めて古い時代の思想と、天の象徴としての意味とに分けて考えられよう。かくして自然を崇拜した多神教の時代から一時代進んだ時期に於て既に述べたような太陽観を見ることが出来る。

ホ 以上の中には、人類に共通する思惟の過程を示したものもあろう。若し中国の特異性を抽出しようとするれば、易の繫辭伝の文に求めることが簡にして要を尽しているものと思う。之は中国の古代人の思惟の根底をなすものであり、又必ずしも古代に限らないのである。

古者庖犧氏の天下に王たるや、仰いでは則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に察し、鳥獸の文と地の宜を觀、近くはこれを身に取り、遠くはこれを物に取る。是に於て始めて八卦を作り、以て神明の徳に通じ以て万物の情に類す。

といい、天地万物を觀察し、その中に含まれた事象より天の理法を知ろうとするものである。

詩経の集伝序に、朱子は

人生れて静なるは天の性なり。物に感じて動くは性の欲なり。夫れ既に欲あり。則ち思なき能わず。既に思あり。則ち言なき能わず。

と述べている。されば詩の六義中の比、興、賦の三体はともに先づ物の動きを提起した所以も繫辞伝の趣旨と相通ずるものがある。詩が尙書、論語、孟子、大学、中庸に引用された理由がここにも存在するものと思う。

大雅蒸民の詩に、天蒸民を生ず。物あれば則あり。といい、孟子告子上には之を引用し亦、庶物に明らかなりともいつている。中庸には、誠あらざれば物なし。といい、大学には、格物致知を窮極の道に説いている。以上に引く「物」の意義に於て諸註には「物は事なり」の詰訓の文を引くものもあるが、中庸の鄭註に、物は万物なり。亦事なり。といい、毛詩の正義に孔穎達は、万物には万事があつて、物と事とは別ではないといい、物あれば則ありとは、物とは身外の物であり、則とは己の有するものであるが、互に法象し合つていて其の実は一なり。といつているのは、万物の中の法則を、人と物とに共通させて見る思想を、明快に表現したものであるというべきであろう。詩経集伝も物を物と事の両意にとつている。かくて中国は古代より万物は天によつて作られたものとし、万物の中に天の法則の内在することを認め、その信念に基づいて万物の中に行われる万事の法則を観察し、発見して天の法則に還元せんとしたものの外にならぬのである。

中庸に、能く人の性を尽くせば能く物の性を尽くす。能く物の性を尽くせば天下の至誠を知る。と考えているのも、これ又繫辞の文と表現を異にして、同意のものと見られるのである。かゝる態度は、中国に於ける古代に限らず、後世に至るも残されたものであり、ヘーゲルがギリシヤ前期の哲学思想を評して、多分に東洋的であり、自然哲学に類すと見たことも首肯されるものである。

この文を草するにあたり、本文に引用した古典の外、王治心の中国宗教思想史大綱、程伯群の中国社会思想史、蔡尙思の中国思想研究法、陶希聖の中国政治思想史、陳遵媯の中国古代天文学簡史などを参考したことを附記しておく。尙編輯の便を考えて原文を書下し文に改めたので、なるべく原文にあたられることを希望する。(30, 12. 20)